

作：松井博子（イラストも）  
監修：武水昭光（シヨアードホテル代産）

●12月 ディスプレーと品揃えを連動させる

麻紀はディスプレイの腕が上がってきた。小柄な麻紀はルビーに服を替せるのも一苦労だったが、今ではその姿も様になっている。

ディスプレイをつくる際、麻紀は教えてもらったことを常に生かすようにしていた。ディスプレイの原則通りにタイトになり、シルエットはしたの、色を替ったり、ストック在庫の多いものを飾るようになった。

しかし、本当は飾りたい商品があるのに、在庫の量が足りないせいで他の商品で要換することがあった。

「千恵さん、このディスプレイ、新作のツリーのニットの方がしつへのきますよね」

「うん、そのほうがいいんじゃないかな」

「でも、入庫した数が少ないんですよね。だからこのニットにしよな」

「あ、そうですね。じゃあ仕方ないか……」

麻紀は、しなめぬの着る人に気付いた。

「どうしようもないのや。そんなに悪い顔して店頭に立つのってお客様さんが迷惑じゃないかよ」

「あ、すみません」

「ディスプレイのごご麻紀に相談されて……」

二人は経緯を話した。

「なるほどね。今まではストック在庫が少なても買手がいろいろ揃っていたから、このようにごごも起らなかったけど……」

「ストック在庫がくさんあるからって、パッとしないディスプレイになってしまっているのはもったいないよね。きっと、店頭の商品を並べたらテーマを考えなきゃならぬんだよね。もっと計画図で書けば、解決できるかもしれないわ」

麻紀は、例を挙げていくか、メニューアイテムは何か、今の時期に合わせたプロモーションは何か、どのようなかを事前に決まっていれば、解決できるものではないかと話した。

「まずその時期に売りたいもの、アールらしいアイテム、デザイン、素材、色、柄、機能、ディスプレイなを定めるようにしてみよう。次にそれをお客様に伝えるために、ディスプレイで見せる、さらに売れたいならいいじゃないかな」

「麻紀さん、ディスプレイの他に、関連のディスプレイに陳列する場合、関連の仕掛けを見せて伝える場合もあるんですよ」

「あー そうだね」

「あー そうだね」

「あー そうだね」

「あー そうだね」

「あー そうだね」

「あー そうだね」

「あー そうだね」

「あー そうだね」

「あー そうだね」



まずその時期に売りたいものを決める

「これが決まったら春夏の品揃えをもっと一度考えてみるわ。テーマに該当する商品の数は集を増やさない」

「そうですね。春物が若上がる前にこれを仕かかると、ディスプレイに飾りたい商品がなくて困ることがなくなりそうですわ」

※この物語はフィクションです。実在のショップ、人物は一切関係ありません。